様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2017
課題番号：２６５９０２１２

研究課題名（和文）国際交流に係る学生支援方針の研究　ー統合支援システムを用いた実証試験ー

研究課題名（英文）Study on supporting strategies and a supporting system for the international student mobility

研究代表者
宮原　啓造（MIYAHARA, Keizo）

大阪大学・国際教育交流センター・准教授

研究者番号：２０４３２５２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：研究全体の最終目標は、受入・派遣留学など国際レベルにおける「双方向学生交流」を通じた教育のさらなる推進である。この目標の達成に向けて、本研究では、まず「双方向学生交流」を通じた教育課程に有用な支援方針を体系化した。続いて該方針に沿った支援項目群を整理統合し、それらを実行する支援システムを設計製作した。さらに該システムを用いた実証試験を通じて、体系化された支援方針の優位性と、構築したシステムの有効性を検証した。これらの研究活動を通じて得られた知見は、学会活動やウェブページによって公開広報した。

研究成果の概要（英文）：The final goal of the research is to promote the higher education further in the world. To achieve this target, this four-year project focused on enhancing the international student mobility. All the five items shown below were examined, and sufficient results have been obtained at each stage as described in this report:

1. Systematization of supporting strategies for stakeholders; 2. Arranging and integration of the supporting item groups; 3. Design and production of the supporting software system for the item groups; 4. Feasibility and verification tests of the produced system; 5. Publication of the research results via academic/conference papers.

研究分野：機械工学，留学生教育

キーワード：双方向学生交流

１．研究開始当初の背景

世界規模で学生交流が活発化している[1]。研究代表者らは、いずれも「双方向学生交流」を実践する部局の教員であり、経験と実例に基づき財政的援助や単位互換指導等その教育課程における様々な支援の必要性・重要性を認識していた。

このような「個別」の支援項目については多くの研究や事例報告があるが[2]、研究分担者は、受入留学中の奨学金制度と卒業後の日本企業への就職支援を有機的に融合させた新たな援助施策を提案していた[3]。研究代表者らは、その提案を核とした議論の結果、全ての要支援項目群を有機的に結合することで、それをさらに発展させた形態、すなわち渡航前から帰国後さらには卒業後までをも包含した教育課程全体を一貫して支援するシステムの構成に思い至り、本研究を開始した。

２．研究の目的

本研究の最終目的は、受入・派遣交換留学など高等教育機関における国際レベルの「双方向学生交流」を通じた教育のさらなる推進である。この目的を達成することを目指して本研究では、その事業期間を通じて以下の各項目に取り組んだ：

- 「双方向学生交流」を実施する教育課程に有用な支援方針を体系化し、それを基盤として支援項目群を有機的に整理し統合した。
- 支援項目群を一貫して実行できるシステムを設計製作し、同システムを用いた実証試験を通じて、支援体系の優位性とシステムの有効性を検証した。
- 研究を通じて得られた知見を学会活動やウェブページ等を通じて広報した。

３．研究の方法

(1) ステークホルダからの情報収集

本研究の柱である支援方針の体系化および支援項目群の統合のために必要となる基盤情報を調査収集した。全ステークホルダの相互関係を図１に、また主な調査対象を表１に示す。

(2) 支援方針の体系化

前項で各ステークホルダから収集した情報を基に、学生交流という教育課程に対する複合化した視座を踏まえた上で、支援方針を体系化した（表2）。

(3) 支援項目の整理・統合

前項で得られた支援方針体系を基盤として、様々な背景の上に要求される各種の支援項目を、時間軸とステークホルダの相互関係を軸に整理し統合した（表3）。

(4) 支援システムの製作および実証試験

前項までの結果に基づいて支援システムを設計製作した。該システムを用いた試験を実施し、システムの有効性等を検証した。

(5) 研究成果の公開

本研究の成果は学会活動やウェブページを通じて随時公開した。

４．研究成果

本研究は学生が遂行する広義の国際交流を対象とするが、表記簡略化のために以下では「留学」と記す。また交流の主体である学生を「留学生」、国／教育機関のうち、留学生を受け入れる側（いわゆる Host）および派遣する側（同、Home）を、それぞれ「受入国／受入大学」「派遣国／派遣大学」と記す。

(1) ステークホルダ相互関係の考察および必要情報の収集

従来、留学生の視点から把握されることが多かった国際学生交流について、それを本来の「教育課程」として捉え直し、ステークホルダ範囲を拡大して、関係する主体の相互関係を再整理した（図1）。そして同図を基に調査対象を設定し、直接面談による聞き取りやアンケートから生の意見を抽出した。主な調査対象を表１に示す。本報告書で以下に示す主張と知見は全てこれらの調査結果に基づくものである。

(2) 支援方針の体系化および考察

研究の対象と最終目的が示す通り、留学およびその支援には「留学生が個々の留学目的を完遂すること」という根源的な理念が存在する。さらに同理念に従う範囲で各ステークホルダは各自の目的を追求する。従って、留学課程を持続可能な体制で円滑に運営し続けるためには、全ステークホルダが前者（根源的な理念）を遵守すると共に、後者（各自の目的追求）を相互に尊重し、さらに目的達成過程で必要な支援を相互に付与できる体制が重要である。

本研究の出発点となった前述の業績[3]は、留学生／大学／企業３者を奨学金という切り口で関連付けたものであったが、それを全ステークホルダのあらゆる関連活動へと拡大したものが、ここで求めるべき「all-win」の支援体系の本質である。各ステークホルダにとっての利益を確保しつつ規制や法令等の外的な拘束を必要としないことが継続性を担保すると考えられる。

このような理念の存在を基盤として、各ステークホルダから面談等で収集した情報を基に支援方針を体系化した(表2)。前述の通り、国際交流という教育課程に対する視座は複合化しているが、理念を指針としてステークホルダ間に衝突が生じない体系が構築された。なお表中の「多様性強化」については、人的交流がもたらす組織内諸活動（教育、研究、製品開発等）への好影響を期待する声が多く、大学教職員および企業関係者の双方から、より一層活性化するための支援増強が望まれるとの共通した意見が聞かれた。

(3) 支援項目の整理・統合および考察

様々なステークホルダから直接収集した支援項目を上記の支援方針体系を基盤として整理し統合した（表3)。留学生の時間軸すなわ

ち「留学ライフサイクル（留学の１周期）」に着目した横軸と、留学生と各ステークホルダとの相互関係を縦軸に据えて、求められる支援項目をセルとしたマトリクス状に配置した。

ライフサイクル全体を通じて全ステークホルダが必要とする共通支援項目は「必要情報の提示」と「通信チャネルの確保」であり、中でも特に留学生は「留学成果の記録と可視化」を必要とすることが確認された。後者は深い学びをもたらす内省[4]にも重要な役割を担い、また帰国後の単位互換や就職活動さらには次世代学生への情報提供等に活用できる重要な項目である。さらに今後進展が期待されている社会人教育の普及に伴い、卒業後・就職後も相当期間のデータ保管が必須と考えられる。

これら共通項目以外の支援項目は、留学の準備段階・渡航中・帰国後という時間軸上のフェーズ毎に統合された「支援項目群」として整理された。さらに同表から、各ステークホルダの達成目的と、その達成過程で生じる支援ニーズとの関係が妥当であり、ステークホルダ相互の衝突は生じないことが再度確認された。

支援項目は基本的に留学生と各ステークホルダの関係から浮かび上がる構図であるが、周囲のステークホルダ同士が留学生を介さずに直接関連を持つ以下のようなケースも存在する（表３最右列）。

- 派遣機関と受入機関、さらに大掛かりな国家間の相互交流協定締結[1]は、その環境整備という観点から学生流動化に多大な影響を持つ。交換留学生（派遣、受入共に）からも、これらが国際交流の活性化に貢献している状況が確認されるが、逆に、このケースにおける難点として「単位互換手続きの煩雑さ」「学事暦の相違」等が報告されている。後者の対策例として、派遣元学事暦を考慮した短期留学受入プログラムを挙げる[雑誌論文-5]。その他、現在我が国でも広く検討されている「英文シラバス整備」「ギャップイヤー活用」等の施策が期待できる。
- 受入留学生は日本国内でインターン企業を選ぶ際に「母国に支社がある企業」を選ぶ傾向があるとの指摘があった。就職を視野に入れた選択であることを鑑み、企業と受入機関との連携が望まれると同時に、国や公的機関を含めた留学生向け就職支援のさらなる充実が求められる。また短期インターンにおいて業務成果が上がらない例が散見された。企業側は社会貢献と理解して受入れているのが現状と考えられるが持続可能性は期待できない。対策例として、企業側が明確なメリットを実感できる形態のインターンプログラムを挙げる[雑誌論文-1]。
- 奨学金制度の重要性は言うまでもないが最近、他社奨学金の返済を肩代わりする企業や自治体についての報道がなされた[5]。奨学金の給付・返還業務に費やされるコストを国全体で総括すれば「トビタテ」に見られる官民協働体制が高効率であると考えられる。派遣留学を目指す多くの日本人学生から「トビタテ」同様の自由度の高い奨学金制度を熱望する声が聞かれており、後継プログラムの継続運用が望まれる。なお東南アジア諸国において教育関係者および保護者から、我が国の奨学金は他国と比べて「手続きが煩雑」「決定が遅い」「金額が不十分」等の意見が多数聞かれた。また「奨学金は名誉として取得するが必ずしも経済的補助を欲している訳ではない」との意見も複数あった。これらは奨学金制度を再構築する必要性と共に、その戦略的な可能性を示唆するものと考えられる。

(4) 支援システムの製作および実証試験

前項までで明らかになった支援項目群を、留学ライフサイクル全体を通じて実行可能な「支援システム」を設計、製作した。システムは「留学ポートフォリオシステム」「HELP/MEnTOR システム」の２部から成る[学会発表-4]。これらのうち「留学ポートフォリオシステム」が、重要な共通支援項目である「必要情報の提示」「通信チャネルの確保」「留学成果の記録と可視化」を分担し、さらに留学候補生の重要関心事である「語学学習支援」機能を「HELP/MEnTOR システム」が実現する(表4)。これらの主要部のほか「交換留学／短期プログラム web サイト」を並行運用することで各支援項目群を実行できる体制とした。

本支援システムにおいて、留学の主体である留学生と、参加する留学プログラムとの関係は多対多対応であり、これは完全２部グラフの全域部分グラフを構成する[6]。同構造に対処できるよう、管理側が設定した各プログラム専用の「コース」へ個別ユーザが自身を「登録する」手順を採用した。また海外留学先を含めた任意地点からの円滑なアクセスを可能とし、同時に接続セキュリティの質を確保するために、学術認証フェデレーションが提供する認証連携（SSO）を導入した。さらに実ユーザからのフィードバックを基にして、表に示すようにシステム仕様を随時改訂した。

構築したシステムを表１に示した各プログラムへ適用し実証試験を実施した。主要共通支援項目の一つである「留学成果の記録と可視化」については、事実と当時の考えを記録することと共に、後日「その時に何を学んだか」を振り返る自己評価こそが教育課程の主要点である[4]。このような教育課程の時間軸の存在を、そのままシステム仕様に取り入れていることが本システムの大きな利点であることが確認された。「通信チャネルの確保」については、大学の web サイトを含めて全てのシステムはモバイル端末対応としており、試験を通じて、時と場所を選ばない高いアクセス性も十分に確認された。ただしユーザインタフェースの使用感に関するコメントと、運用ルールの簡素化に関する要望が多く寄せられた。これらはユーザの自発的な継続利用（規

則等の強制不要）の意欲を引き出す鍵であって、システムの基本性能を確保した上でユーザインタフェースを作り込む努力が必要と考えられる。同様のシステムを安定運用するために、多くのユーザが使い慣れているポピュラーな SNS 等のインタフェース部が一般に開放され、そのまま導入できれば、大多数のユーザにとって使いやすいシステムを構築することができると考えられる。「必要情報の提示」については、提示情報の選定と整理が重要であることが試験実施を通じて理解された。すなわち、ユーザが共通して必要としている情報を適切な粒度で適時に提供することの重要性である。その実行に大きく寄与するのは、システム運用スタッフの力量であることも，実証試験を通じて確認された。

上記以外の、表 4 に示した「留学ポートフォリオシステム」の各種支援機能を活用することで、留学生からの提出物やアンケート回収、さらには教員が担当する留学相談業務における業務効率改善ニーズが満たされることはある程度予想された通りであったが、各種語学学習支援の結果が予想を大幅に超えるものであったことは、喜ばしいと同時に、潜在的な学習ニーズの存在を示しており、幅広い支援プログラムの開発が望まれる。また上記の他に「留学ポートフォリオシステム」に蓄積された学習履歴に関し、本人評価と教員評価との比較についての検討が、そのまま FD に活用できるとの知見が得られた。

本システムと並行運用している「交換留学／短期プログラム web サイト」もユーザのフィードバックに沿って仕様変更を施した。その中でも、共通支援項目の「必要情報の提示」に包含される「留学に関する FAQ ページの整備」は大きな成果をもたらした。従来メールや面談による留学相談の質問内容が微細な事項に終始し非常に雑駁な印象であったが、研究分担者の詳細な分析と入念な準備によって完成した FAQ ページの整備後は、その類の相談数が激減した。同ページは継続的な提示情報の整理（アップデート）が求められ、ここにもシステム運用スタッフの能力と工数が要求される。

この FAQ と共に、留学体験学生の記録（留学 OBOG アーカイブ）も、次に留学しようとする学生にとって貴重な情報源となる。特に大きなイベントの記録に限ったものでなく、日々の生活や学習に関するアーカイブへのニーズは高くアクセス数も多い。このような情報は「体験談」として、個人情報を処理した上で留学 OBOG の好意により掲示できているが、今後は長期的視野に立ち、その掲示期限についての適切な対応が必要と考えられる。システム側で掲示開始当初から、終了期限を設定できる仕組みが望まれる。また留学 OBOG との直接面談を希望する学生も多く、頻繁にそのような相談が寄せられる。現システムでは学生が直接コンタクトできる場は設けていないものの、システムログイン時に厳格な個人認証を実施していることもあり、進むべき方向の一つと考えてよいだろう。

(5) 研究成果の公開

本研究の大きな成果の一つは、前項(4)で示した支援システムの構築である。同ポータルサイトに問合せ先を記載すると共に、マニュアル等の公開資料にシステム仕様を記載した。システムの URL と本研究の成果発表論文リストをまとめて次節 5 に示す。

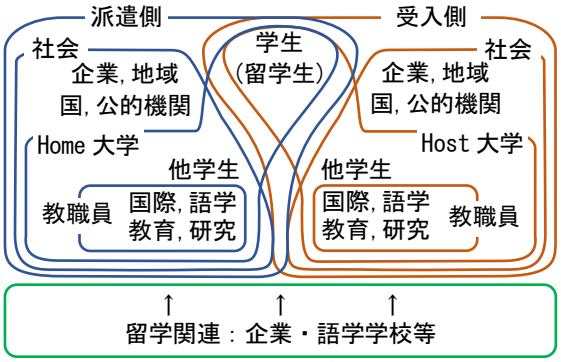

図 1　ステークホルダの相互関係

表 1　主な調査対象（面談，アンケート等）

面談調査
マレーシア　2014.11：日本大使館，マレーシア教育省，現地高等学校（2 校），予備教育機関（3 校），大学（1 校），JICA，日本財団
インドネシア　2014.11：日本大使館，日本財団，JICA，JASSO，現地高等学校（2 校）
韓国　2015.10：大学（2 校）
タイ　2016.12：大学（2 校）
マレーシア　2017.11：予備教育機関（2 校），大学（2 校），日本人会，現地企業（2 社）

派遣受入プログラム	時期	年度			
		H26	H27	H28	H29
日本語集中 4/8W	夏季	44	49	59	49
	冬季	22	29	28	34
日本語集中 3W	夏季	12	11	9	N/A
	春季	12	12	13	15
理工系研究 6M/1y	春季	24	20	22	17
	秋季	27	44	20	26
同　8W	夏季	N/A	12	21	27
教養英語コース 6M/1y	春季	60	80	73	70
	秋季	75	79	83	72
インターン 8W	秋季	N/A	N/A	15	16
英語メンター 6M/1y	春季	N/A	14	22	28
	秋季	N/A	7	33	37
短期語学研修 5W	夏季	39	37	18	29
	春季	35	29	22	25
ポートフォリオ利用	通年	36	250	1224	1869
留学相談面談利用	教員	143	159	119	116
	OBOG	20	39	75	53
留学説明会参加	入門	218	178	212	202
	本編	307	341	358	444
大学間交換留学派遣	通年	134	160	150	142
留学生向け講義担当 FD	春季	14	4	6	13
	秋季	18	18	21	8

＊網掛部：支援システム実証試験の対象プログラム

表２　支援方針の体系化

	主なステークホルダ				
	留学生	大学教職員	社会		
			国・公的機関	地域	企業
合目的支援方針	安全確実に留学して体験,教育等の機会を得る	学内多様性強化	国力向上	地域の活性化	社内多様性強化
		国際的評価向上	人材確保	国際交流推進	人材確保

表３　支援項目群の整理と統合

ステークホルダ	留学ライフサイクル →			備考
	留学前 検討および準備期間	留学中	留学後 帰国	
留学生	情報：留学とは,留学先大学,生活,奨学金 支援：語学学習,事前学習	支援：学習,研究,生活,メンタルヘルス,緊急対応 ↓：　国際交流,インターン	支援：記録保管,単位互換,就学指導,就職活動 ↓：　留学記録	
留学 OBOG	↑：　留学記録,相談対応	↑：　（相談対応）	（右セル参照）	帰国後の留学生が順次遷移する
他学生			情報：留学記録	留学希望生へ遷移する可能性
教職員	↑：　情報（留学,留学先大学,生活,奨学金） ↑：　支援（語学学習,事前学習）	↑：　支援（学習,研究,生活,メンタルヘルス,緊急対応）	↑：　支援（学記録保管,単位互換,就学指導,就職活動）	交流協定＝プログラム運営で派遣/受入が相互協力
企業	↑：　情報（奨学金,就職活動）	↑：　インターン（受入）	↑：　就職活動	派遣/受入両国で一致するケースもある ＊国が奨学金を取りまとめる等のケースもある（ex.トビタテ）
国・地域	↑：　情報（奨学金）	↑：　国際交流（受入）	情報：留学記録	国家レベルの交流協定もある
留学関連企業 等	↑：　サービス提供	↑：　サービス提供	情報：留学記録（商品開発,広告）	対価を得てサポートを提供

＊「情報」「支援」はニーズ、矢印は支援シーズ、

表４　支援システムの仕様一覧

留学ポートフォリオシステム

ログイン・ログアウト
プロフィール　表示，編集
ユーザ　登録
コース　新規作成，編集，削除，表示，検索
課題　新規作成，編集，削除，表示，検索，提出確認，提出状況詳細確認
コース履修生　一覧表示，課題提出状況確認，追加，削除，検索，フィルタ，ソート
掲示板トピック　一覧表示，詳細表示，新規作成，編集，検索，ソート
コース履修学生向けメール　一覧表示，送信
学生　プロフィール表示，履修コース確認，検索，フィルタ，ソート，ポートフォリオ表示，公開範囲設定
ダッシュボード機能
面談予約　一覧表示，詳細表示，申請対応，管理設定
アンケート　一覧表示，検索，フィルタ，ソート，作成，基本設定，設問設定，回答対象者設定，確認，内容表示，集計
留学体験アーカイブ　一覧表示，検索，フィルタ，ソート，閲覧，記事作成，編集
ヘルプ，システム言語の切り替え
＊見直し仕様 修了者アクセス範囲改定，対応ブラウザ拡大，機種依存文字書換，面談時間と会場変更対応，サーバ変更対応，学事暦変更対応検討

HELP!/Mentor システム

ログイン・ログアウト
メンティー　一覧表示，詳細表示，プロフィール表示，カルテ編集，カルテ表示
メンター　一覧表示，詳細表示，プロフィール表示，カルテ編集，カルテ表示
メンティー・メンター　マッチング
メッセージ　表示，送信，返信
ヘルプ，システム言語の切り替え
＊見直し仕様 マッチング希望日時欄追加，メンタリング日時欄変更，相互評価記入方法変更，英語試験欄追加，プロフィール公開範囲設定方法変更

＜引用文献＞

① Australian Government, “The New Colombo Plan Scholarship Program,” [Online] dfat.gov.au/people-to-people/Pages/people-to-people.aspx [Accessed:14-Jun-2018].

② R.King, “International student mobility literature review,” UK National Agency for Erasmus, 2010.

③ 近藤佐知彦「労働対価型奨学金導入を」朝日新聞オピニオン，2013.

④ 大山牧子，根岸千悠，山口和也「学生の理解を深める反転授業の授業デザインの特徴」大阪大学高等教育研究，No.3, pp.15-24, 2016.

⑤ 「住むなら奨学金肩代わり／自治体相次ぎ導入」日本経済新聞，2016.

⑥ D.B.West, “Introduction to Graph Theory 2nd edition,” Pearson, 2017.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　16　件）

① 宮原啓造，「講師派遣型インターンシッププログラムの開発」多文化社会と留学生交流，査読無，No.22, pp.19-22, 2018.

② MIYAHARA Keizo,“Affecting Factors and Supporting Measures for International Student Mobility,” Proceedings of the IEEE TALE, 査読有，pp.283-289, 2017.

③ 近藤佐知彦「現代のホームステイのあり方に関する一考察」，留学交流，査読無，No.78, pp.12-32, 2017.

④ 宮原啓造「学生の英語力とその強化方策に関する考察」多文化社会と留学生交流，査読無，No.21, pp.11-17, 2017.

⑤ MIYAHARA Keizo, TANAKA Toshihiro, “Short-term Exchange Programs for Engineering Research Education,” Proceedings of the 5th IEEE TALE, 査読有，pp.44-49, 2016.

⑥ 宮原啓造，近藤佐知彦「マレーシアの教育制度と中等教育機関における日本語教育」留学交流，査読無，No.61, pp.1-7, 2016.

⑦ Sachihiko Kondo, “Impact of the English Language on University Policy in Malaysia and Japan,” English in Malaysia: Current Use and Status, 査読有，No.1, pp.172-190, 2016.

⑧ 近藤佐知彦「『留学ポートフォリオ』に関する報告」多文化社会と留学生交流，査読無，No.20, pp.55-63, 2016.

⑨ 歳岡冴香「留学生とのメンタリングによる英語学習支援の試み」大阪大学高等教育研究，査読有，No.4, pp.87-91, 2016.

⑩ 磯野英治，近藤佐知彦，宮原啓造「2015年度短期日本語教育プログラムの実施と新たなプログラムの構築」多文化社会と留学生交流，査読無，No.20, pp.19-24, 2016.

⑪ 宮原啓造「短期留学生向け『理工学研究プログラム』の開発」多文化社会と留学生交流，査読無，No.20，pp.75-80，2016.
⑫ MIYAHARA Keizo, TOSHIOKA Saeka, KONDO Sachihiko, “ICT Systems for Student Mobility Programs in Tertiary Education,” Proceedings of the IEEE TALE，査読有，pp.63-66，2015.
⑬ Miyahara Keizo,“Engineering Education in Non-Native Language,” Advanced Science Engineering and Medicine，査読有，No.7，pp.543-549，2015.
⑭ 宮原啓造「国際教育交流における人名の表記法に関する考察」多文化社会と留学生交流，査読無，No.19，pp.57-64，2015.
⑮ MIYAHARA Keizo,“Engineering Education in Non-native Language,” Proceeding of the SOCIO-CULTURAL 2015，査読有，pp.1-6，2015.
⑯ MIYAHARA Keizo,“On-Campus “Hands-on” Research Opportunities for International Exchange Undergraduate Students,” Proceeding of the IEEE TALE，査読有，USB#8G-3，2014.

〔学会発表〕(計 9 件)
① MIYAHARA Keizo,“Affecting Factors and Supporting Measures for International Student Mobility,” International Conference on Teaching, Assessment, and Learning for Engineering, Dec. 2017, Hong Kong.
② MIYAHARA Keizo, “TANAKA Toshihiro, Short-term Exchange Programs for Engineering Research Education,” International Conference on Teaching, Assessment, and Learning for Engineering, Dec. 2016, Thailand.
③ 近藤佐知彦「留学ポートフォリオの紹介」グローバル人材育成教育学会第二回関西支部大会，2016，大阪大学.
④ MIYAHARA Keizo, TOSHIOKA Saeka, KONDO Sachihiko, “ICT Systems for Student Mobility Programs in Tertiary Education,” International Conference on Teaching, Assessment, and Learning for Engineering, Dec. 2015, China.
⑤ 近藤佐知彦「日本人学生の派遣留学促進のための留学生を活用した英語学習」グローバル人材育成教育学会第 3 回全国大会，2015，明治大学.
⑥ MIYAHARA Keizo, TANAKA Toshihiro, “Attractive Engineering Research Program for International Exchange Students,” International Conference on Interactive Collaborative Learning, Sep. 2015, Italy.
⑦ MIYAHARA Keizo,“Engineering Education in Non-native Language, ” International Conferences on Socio-Cultural Relationship and Education Pedagogy Learning Sciences, Jan. 2015, Indonesia.
⑧ MIYAHARA Keizo,“On-Campus “Hands-on” Research Opportunities for International Exchange Undergraduate Students,” International Conference on Teaching, Assessment and Learning for Engineering, Dec. 2014, New Zealand.
⑨ 歳岡冴香「留学生との協働を中心とした海外留学事前教育」大学英語教育学会第53回国際大会，2014，東京工業大学.

〔図書〕(計 1 件)
① 歳岡冴香， 大阪大学出版会「ライティング・スピーキングも怖くない IELTS 完全対策」2017.

〔その他〕
ホームページ等 (計 5 件)
① 大阪大学交換留学プログラム web サイト
www.ex.ciee.osaka-u.ac.jp
② 大阪大学短期プログラム web サイト
www.ex.ciee.osaka-u.ac.jp/shortstay-programs
③ HELP/MEnTOR システム
www.osaka-u.sys.projecthelp.jp
④ HELP/MEnTOR システム＿解説編
osaka-u.projecthelp.jp
⑤ 留学ポートフォリオシステム
exportfolio.ciee.osaka-u.ac.jp

６．研究組織
(1)研究代表者
宮原 啓造 (MIYAHARA, Keizo)
大阪大学・国際教育交流センター・准教授
研究者番号：20432528

(2)研究分担者
近藤 佐知彦 (KONDO, Sachihiko)
大阪大学・国際教育交流センター・教授
研究者番号：70335397

歳岡 冴香 (TOSHIOKA, Saeka)
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号：40708468